

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 461 回 人を傷つける、あまりにも安易な自分語

2012. 2.26

小言ばかり言っていると、せっかく明るくて陽気なかわいい女の子が、寡黙になってしまう...いい加減にしてよ！おじさん！...って叱られそうだが、「小言を言うおじさん」が少なくなった今、敢えてまた、言ってしまう。(これが余計なことなのだ)

軽率な言葉は、人を傷つけます。

「冗談でした...」

「あの人は、天然だから...」では済まされません。

いつも相手を思い、気遣い、心配りすれば、

良好なコミュニケーションができるはずで、

「言葉」の重みを感じるべきです。

【思想家 橘 榮一郎】

あまりにも安易な自分語で、自分の「ものさし」だけで会話をしている人が、いかにも多いようだ。日常会話に「マニュアル」なんぞあったら、息苦しくてたまらないが、昔は「マニュアル」といわず、「常識」といっていた。その会話における常識がなくなりつつある。

こういうタイプはまず、判断の基準が「自分発」、確かに相手と会話しているのだが、相手の顔は自分のメガネでしか見ていない。

相手がどう思うか、何に関心があり、何を求めて、何を言おうとしているのか...

全くお構いなし。まるで小学校の子供と同じかもしれない。

良く、「子供は正直でうそをつけない...」と言うが、それは配慮ができない、未熟さを比喩したもので、実は美辞麗句ではない。

あなたの、その一言で、一瞬のうちに商談が破断した...

たぶん本人は、なんでそうなったか分からないタイプである。

「親しき仲にも、礼儀あり」とはまさにその通り、たとえ夫婦でも、恋人同士でも、言っている事とってはいけない事があるはずなのに、悲しいかな、分かっていない。

決して悪感情があったわけではないのだが、知らずして人を傷つけ、相手のプライドを叩き潰し、コミュニケーションを「**ディス化**(良好なコミュニケーションを断絶させる)」する。「配慮のない人」と貼られたレッテルは、そう簡単に、剥がすことができなくなるのである。

偉い大臣や若い政治家にも、この傾向が目立っている。「日本語が分かっておらん！」と怒る前に、やっぱり彼らの常識が違うのかもしれない。その証拠に、同じ人が同様の失言を何度も繰り返し、全く懲りない逞しい面々である事、思い出して欲しい。

相手を尊び、「...相手の立場に立って、自分のことより先ず相手...」、これこそ日本人が大切にしてきた「思い遣り」であろう。いや、**Change Chair** (チェンジ・チェア)という言葉がある通り、日本人に限った思想ではなく、人として最も大切なことのひとつである。配慮をかけた言葉による暴力、その凄さを思い知るべきと思う。